４歳児前期（４月～10月頃）

ねらい

- ◆ 友達と関わる中で自分の思いを出し、相手の気持ちに気付く。
- ◆ 約束やルールを守ることで、遊びが楽しくなったりみんなが気持ちよく過ごせたりすることを感じる。

《関わり》 親しみ 自己発揮 共感 調整 など	・保育者に親しみをもち、困ったときなどに自分から伝える。 ・友達と遊ぶ中で、思いや考えを表情や動き、言葉で自分なりに表現する。 ・様々な人との関わりの中で、自分ができることをしたり、してもらったりするうれしさを感じる。 ・歌を歌ったりゲームをしたりして、クラスみんなで過ごす楽しさを味わう。 ・異年齢児との関わりの中で、親しみや憧れを感じる。 ・友達との関わりの中で、思うようにならないことを経験し、相手にも思いや考えがあることに気付く。
《自　立》 自信 判断 身だしなみ 礼儀 など	・クラスの中で、伸び伸びと自分を出して遊ぶ。 ・保育者や友達の言動から、してよいこと、悪いことを自分なりに意識する。 ・遊びに合った身支度をしようとする。 ・「ごめんね。」「ありがとう。」などの言葉を必要な場面で使い、相手に伝わったうれしさを感じる。
《規　範》 決まり ルール マナー など	・遊具の使い方や緊急時の行動の仕方など、安全に過ごすための決まりや約束を知り、自分なりに守ろうとする。 ・自分が使った物は、最後まで片付けようとする。 ・イメージの世界を楽しみながら、ルールに沿って遊ぶ楽しさを感じる。 ・電車やバス、公共の施設など、公共の場所での行動の仕方を知り、行おうとする。

保育者の関わりで大切にしたいこと

- ● 一人ひとりに声を掛けたり、スキンシップを図ったりし、幼児が保育者に親しみをもてるようにする。
- ● 友達との関わりの中で、自分の思いを言葉で伝えようとする姿を認め、励ましたり一緒に伝えたりし、相手に伝わる喜びに共感する。
- ● 保育者間で連絡を取り合い、異年齢児の遊びが互いに見えるような場を設定し、年長児に対する憧れや年少児に対する思いやりの気持ちをもつきっかけにする。
- ● 思うようにならなかったことなどを、自分で受け入れられるまでの時間を保障し、見守ったり認めたりする。
- ● 生活や遊びの中で、自分なりに考えて行動しようとする姿を認める。
- ● 幼児の実態に合わせて約束や決まりを伝えたり、具体的な場面を取り上げて一緒に考えたりし、幼児が決まりの必要性を感じられるようにする。
- ● ゲームでは、お話のイメージを取り入れるなどの工夫をして、幼児が楽しみながらルールを理解し、ルールに沿って遊ぶ楽しさを感じられるようにする。

家庭とともに

- 入園、進級に伴う保護者の不安な気持ちを受け止め、園での幼児の様子を具体的に伝え、保護者が安心感をもてるようにする。
- 友達との関わりの中で様々な感情に触れることが、規範意識の芽生えを培うために大切であることを伝える。同時に、友達関係での幼児の葛藤など、不安なことは気軽に相談してもらい、園や家庭での様子を知らせ合いながら対応できるようにする。
- 幼児が４歳児なりに考えて行動できるように、大人が問い掛けたり、自分なりにやってみようとする姿を認めたりすることの大切さを知らせる。うまくいかない場面では、一緒に考える、分かりやすく伝えるなど、この時期に応じた大人の関わり方を具体的に紹介する。

４歳児の友達との関わりについて考えましょう　～保護者会～

【目　的】 ４歳児における友達との関わりについて、幼児の発達や大人の関わり方などを保護者とともに確認し、園と家庭とが共通の見通しをもって幼児を育てていくきっかけにする。

【内　容】 資料を使った保育者の話・グループ協議

〈資料の例〉 ①「規範意識の芽生えの醸成　家庭用リーフレット」（P.55～58）

②「規範意識の芽生え」に関する発達の道筋及び大人の関わり（P.13～14）

1　①を用いて、生まれてから小学校入学までの発達について保育者が話す。

2　②の中から４歳児の友達との関わりに関する部分を用いて、この時期の幼児にとって大切な経験（様々な感情に触れること、うまくいかない場面に出合うことなど）や発達の見通し、その際の大人の関わりで大切なことを、保育者が具体的な場面を通して伝える。

3　１、２の話に関連して感じたこと、家庭で心掛けていること、子供の姿などを、数人のグループで話し合う。保育者は、安心して話せる雰囲気をつくりながら、話し合いに参加する。

こどものつぶやき　「お・じ・ぎ・そ・う♪」

e 君はオジギソウが大好きで、何度も触れては、葉が垂れる様子を見ていました。

ある日、e 君がオジギソウの前に立って、「お・じ・ぎ・そ・う♪」とつぶやきながら、おじぎをしていました。保育者がたずねると、「いつも僕におじぎしてくれるから、僕もおじぎしてるの。」と e 君。

保育者はほほえみながら、「そうね、いつもおじぎしてくれてうれしいものね。先生もおじぎしよう。」と言い、e 君と一緒にオジギソウに手を触れ、おじぎをしました。とてもほのぼのとした温かい気持ちになりました。

あんな場面　こんな場面　（指導例）

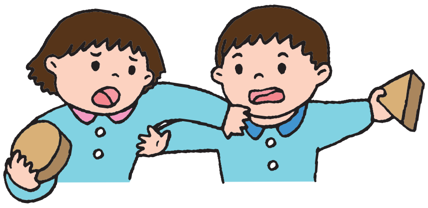
それぞれのやりたいこと

４歳児６月

H児がままごとをして遊んでいるところにＩ児が「入れて。」と言って入ってきました。H児は「いいよ。」と答えて二人で遊び始めました。

しばらくすると、H児の「Ｉちゃん、だめ。やめてよ！」という大きな声がしました。

「先生、Ｉちゃんが食べ物持って行っちゃう！」とH児。H児とＩ児はままごとの食べ物を取り合っています。



ここがポイント！

○　**仲良く遊ばせようと急がずに、それぞれの思いを実現していきましょう。**

「おうちの隣にレストランを作りましょうか。」

保育者が遊びの場を見てみると、H児はテーブルに食べ物を置いていて、Ｉ児は積み木で組み立てた家のそばに食べ物を並べていました。

保育者は互いの思いが話せるよう、「Ｉちゃんは積み木に食べ物を並べているのね。どうしてなのかな。」と問い掛けました。「レストランなの。」とＩ児。保育者は「そう、Ｉちゃんはレストランにしようとしていたのね。」とＩ児の気持ちを受け止めました。また、「Hちゃんはどうして積み木の方に持って行ってほしくなかったの。」とH児が遊んでいたイメージを話せるよう働き掛けました。「だって、おうちにして遊んでいたんだもん。」とH児。

保育者はH児とＩ児の思いの違いを整理した後、Ｉ児に「Hちゃんはここをおうちにして遊んでいたんだって。レストランにはできないみたいね。」と伝えました。その後Ｉ児と相談し「おうちの隣にレストランを作りましょうか。」と、H児とＩ児の遊びの場を分けて近くに設定し、それぞれの遊びを続けられるようにしました。

その後H児とＩ児は「お隣」として、行き来をしながら遊びました。

●　それぞれの思いを保育者が受け止め、整理することで、自分とは違う相手の気持ちに気付きます。このことは、互いの思いに共感する素地になります。

必要を感じて、ルールを決める

4歳児9月

トランポリンは人気のある遊具です。バランスを取りながら、ジャンプをするのが楽しくなってきています。

５、６人の幼児が集まってきました。どの幼児も早くトランポリンをしたくて、順番を争って乗っていますが、トランポリンには一人ずつ乗るという、クラスの決まりは守っています。

様子を見ていた保育者は、「順番にしたらどうかな。」と言いながら、椅子を並べました。

ここがポイント！

○　幼児が自分から気付いて、ルールを考えようとする機会を大切にしましょう。

「私が言ったの。」「そう。けんかになっちゃったから。」

椅子が並び、幼児たちは椅子に座ります。しかし、順番がきたＪ児はなかなか代わろうとしません。「Ｊちゃん、ずるいよ。」と声が上がります。するとＫ児が「じゃあ、10回ずつにしようよ。」と提案します。みんなも賛成し、一人がジャンプする回数を10回ずつにすることにしました。どの幼児も自分の順番を安心して待っています。

その後、「入れて。」と仲間に入ろうとする友達に、「じゃあ、椅子をもってきてね。10回ずつだよ。」と伝えています。保育者が、「10回ずつって決めたのですね。」と声を掛けると、その場にいる幼児は「私が言ったの。」「そう。けんかになっちゃったから。」と言ったり、うなずいたりし、満足そうな表情になりました。

● 自分なりに考えた方法で楽しく遊んだ経験の積み重ねが、ルールの必要性を感じ、自分たちでルールを作り、守って活動することにつながります。

〈この姿の背景には…〉

同じような場面でのそれまでの幼児の経験や保育者の関わり方が、幼児が判断し行動する際の基準になっていきます。